天智天皇山科陵の墳丘遺構

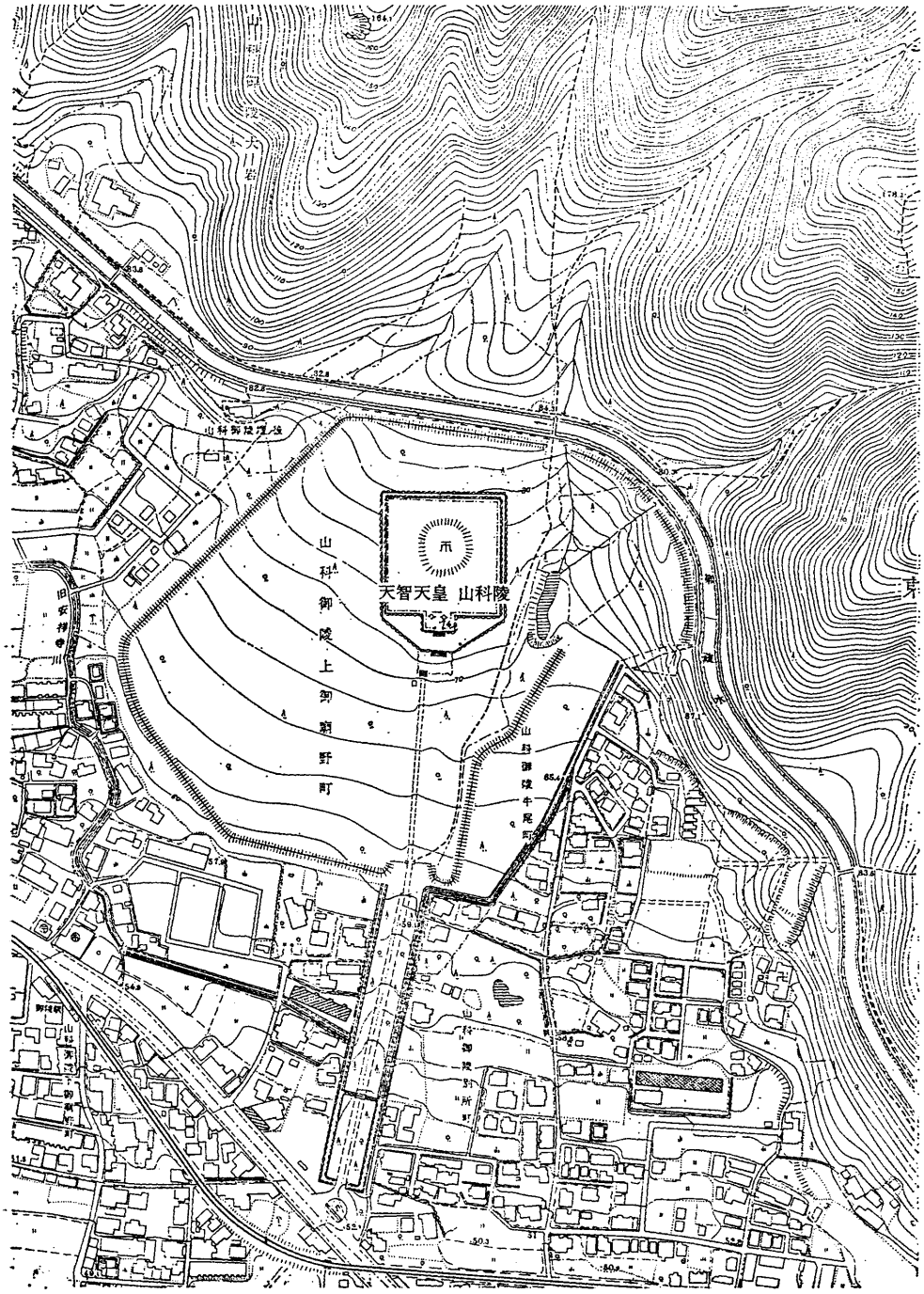
一　山科陵の概況

天智天皇の山科陵は、京都市山科区御陵上御廟野町五二番にある。北方大文字山から派出南下する山丘が裾部で傾斜を緩めた斜面に立地し、北と東に山丘が迫る。西に日ノ岡を望み、南に山科盆地が広がる。緩斜面は、北方の山丘の三支脈の中央の支脈の延長のようにも、二支谷が流し出す土石の堆積のようにも見える舌状の丘陵である（第一図）。

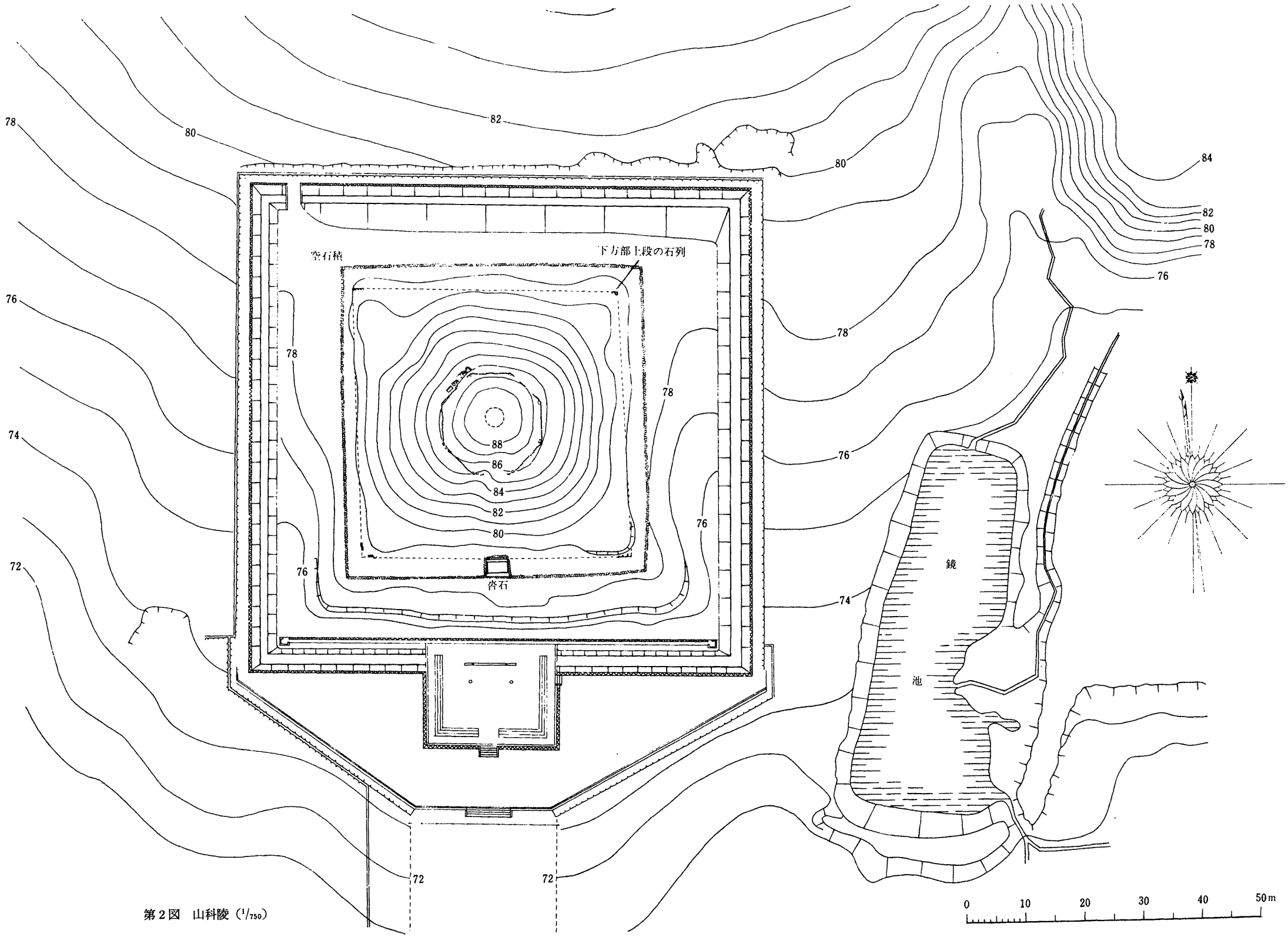
丘陵状の緩斜面は方形状に整地されているらしく、陵墓地形図（第二図）の墳丘の東西両側面、特にその南半部の等高線は東西方向に走り、その外では北上（北東または北西に）する。墳丘の北側も、現状は斜面を切っているのを差し引いても不自然な等高線の走行が見られる。また、墳丘南側も、現参道に沿って地膨状に等高線が走り、その中心線は墳丘中心を通る南北線にほぼ一致するようで、ここにも整地が考えられる。つまり、山科陵の墳丘は、緩斜面を羽子板状に整地した基盤の北方の方形部の上に築かれているものと推測される。

現在、墳丘の外周は、下方部下段裾から数メートルおいて、南に御拝所が設けられ、ここを除く四方に土堤が繞る。墳丘外周の土堤は、文久の修陵によって初めて設けられたが、現在の土堤は大正元年に竣工したものである。新旧両土堤の関係は未詳。その内側の墳丘は、外形上、上円部一段、下方部二段にみえ、下方部は、下段南辺裾に、整った花崗岩の切石を二段積みにし、上段四辺裾に大きな河原石を一～四段乱積みにしている。両者とも裏込めになる内側の表面がその内側の傾斜より緩やかなこと・遺存状況が割合しっかりしていること・文久の修陵図に見えないことから、その築成は、明治以降で、本来の墳丘下方部の裾ではない。

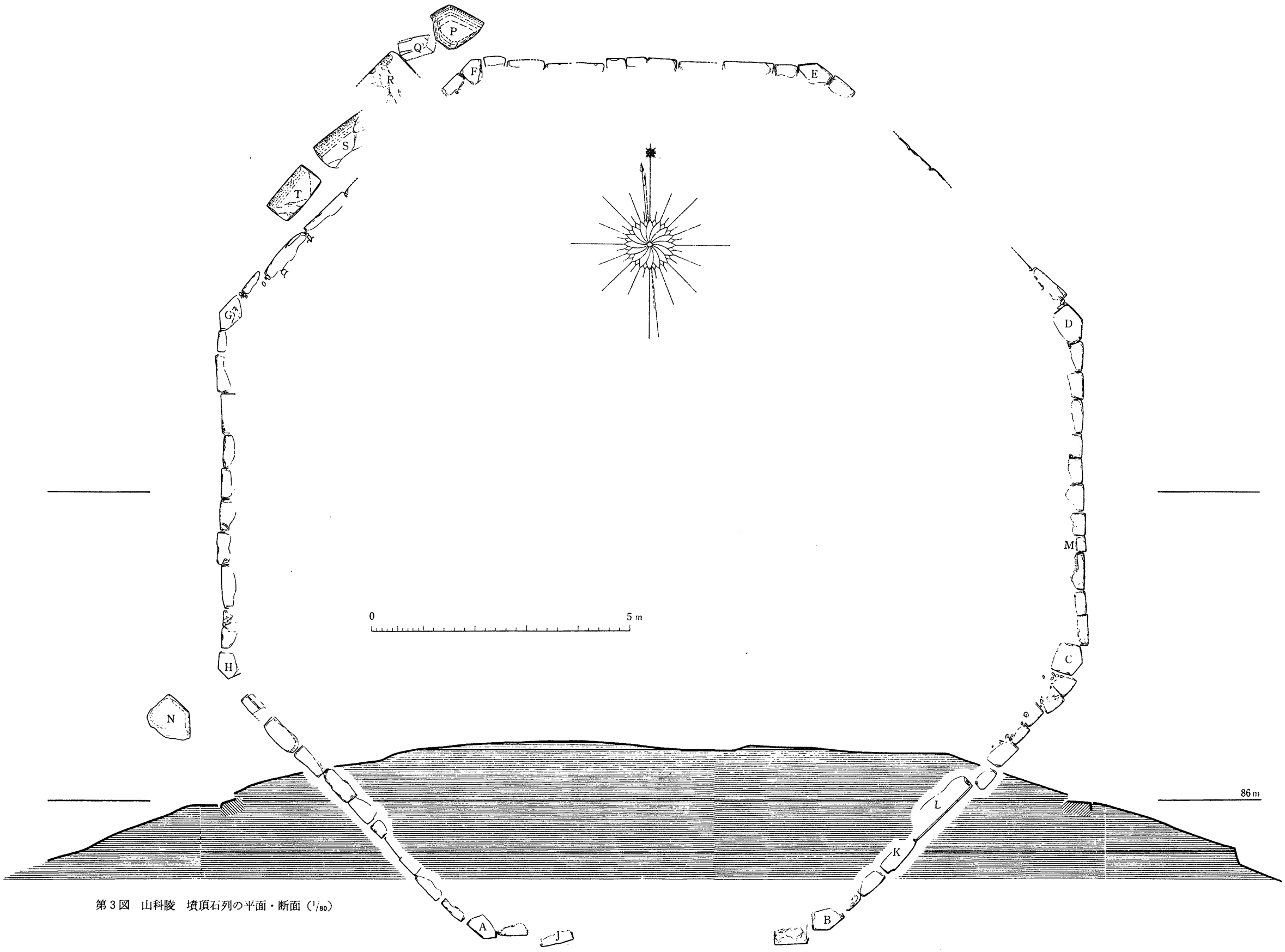
なお、土堤の外には、墳丘の南東に「鏡池」と称する南北に長い池がある。また、現在の陵域外周には、明治四十三年竣工の土堤が繞る。第二疏水の掘削に際し、この付近では第一疏水を拡幅しており、これによって生じた残土を盛上げて土堤としたものである。



第１図　山科陵付近の地形（1/5000）



第2図　山科陵（1/750）



第3図　山科陵　墳頂石列の平面・断面（1/80）

二　調査の経過

かねてから、当陵の墳頂部には八角形の石造施設のあることが知られていたが、中尾山古墳の発掘を契機に、八角墳に対する関心が高まりを見せた。昭和五十年六月、当陵ほかの八角墳について、末永雅雄氏に表面調査を願ったところ、その結果の報告とともに、改めて墳丘調査を行うよう、助言を頂いた。[1] 従来、陵墓の墳丘については、表面調査を逐次行っていた。工事に伴なう事前調査のため余裕がなく中断していたのであるが、その一環として当陵の調査を行うこととなった。

昭和五十一年二月十日から九日間、中村一郎陵墓調査官（当時）のもとに墳頂部石列を中心に調査した。石列は、既に隅角石八個と若干の切石が露見していたが、落葉と腐植土を取除いて、ほぼ全体を露出させ、実測図と写真をとった。併せて、上円部斜面の河原石や加工された石、下方部の上段四隅や沓石（後述）などを観察したが、必要な実測図を作製するには至らなかった。同年三月九日、墳頂石列の位置を既知の座標点から求める測量を行った。更に昭和六十二年九月十四日、以前の調査結果を確認、補充する調査を行った。[2]

三　上円部

(一)　上円部墳頂

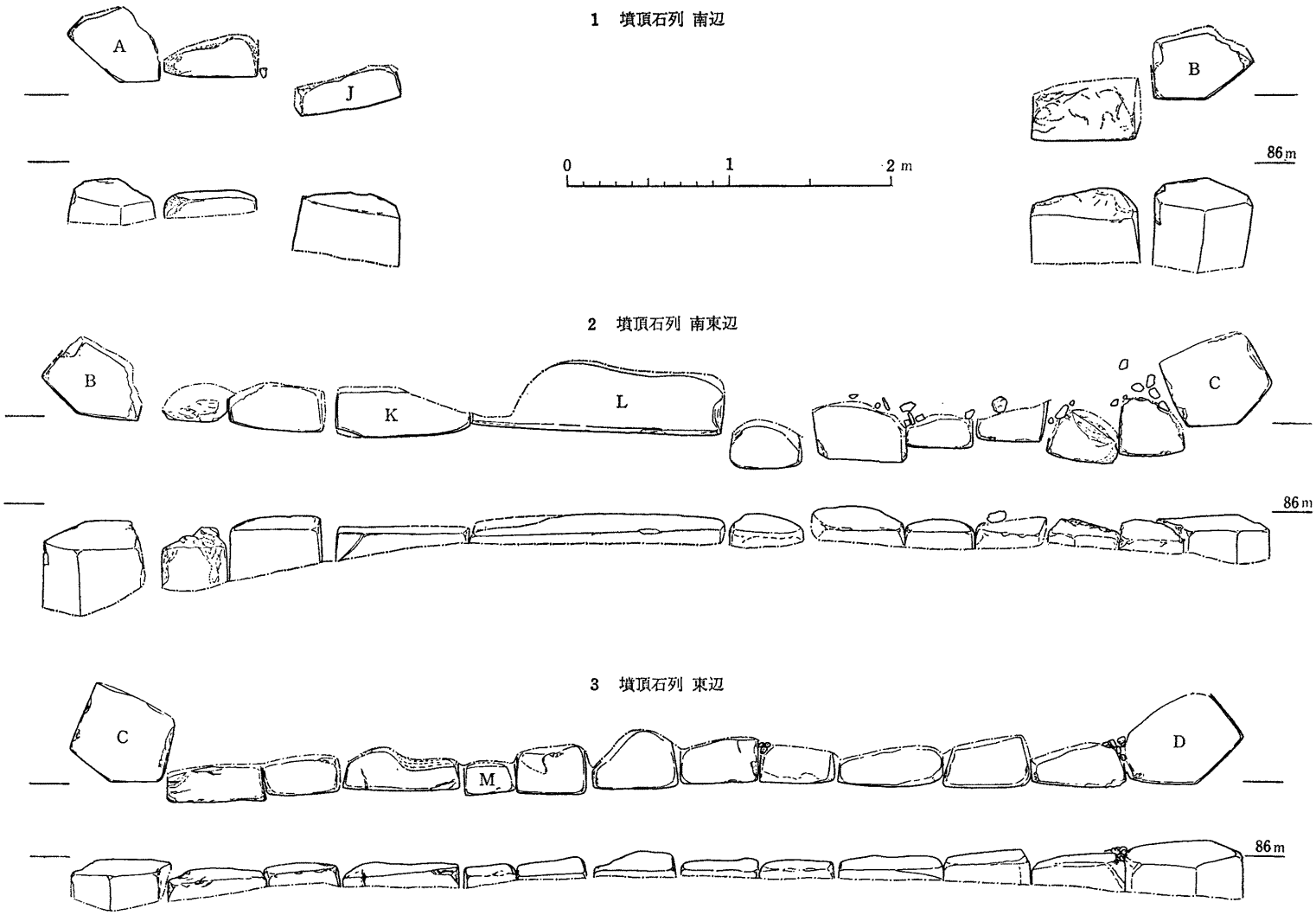
上円部墳頂は、わずかな傾斜のほか、中央に浅い窪みや南方から上円部中腹に至る浅い溝があるが、ほぼ平坦といってよい。その径東西約一三メートル、南北約一一メートル。表面には、拳大を中心とする小さな河原石が数多く散在し、ボーリング・ステッキによる探査（以下「試錐」という）でも、平坦面と周縁全体にわたって地中の相当深くまで礫が密に認められる。なお、昭和二年測量の当陵地形図は、現状と齟齬するところがあり、この墳頂部についても、現状は標高八七メートル強が最高所なので（第三図）、地形図の八八メートルの等高線は余計である。

(二)　上円部墳頂の石列（図版二・三、第三図～第六図）

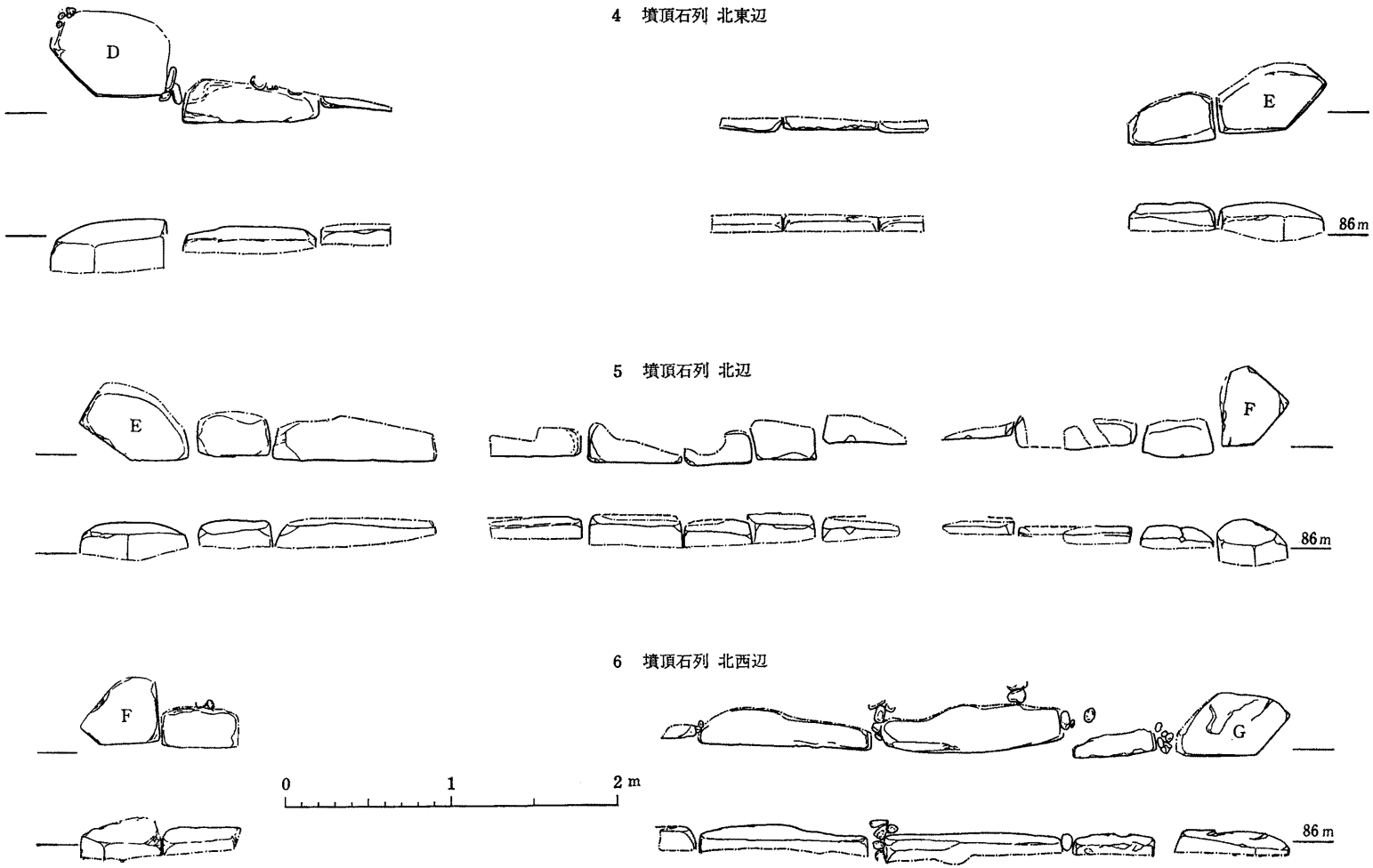
墳頂平坦面の外縁の法肩から一～三メートル外側に石列がある。石列は、花崗岩の切石の外側面をそろえて並べたもので、第三図のとおり平面八角形に墳頂外周を繞る。八角形の各頂点には、その内角にあわせて外側面＝前面を加工した石（以下「隅角石」といい、図のようにA～Hとし、各隅角石の頂点をa～hとする）が置かれ、その間に外側面を面取した角石状の切石が配される。

隅角石の頂点a～hを順に結んだ八角形は、辺長が区々な等角八角形で、各辺はほぼ東西・南北またはこれらと四五度の角度をとり、なかでもghは真北を指す。各辺の現在長は、次のとおりである。

ab	六七三センチ	bc	七一九センチ
cd	六七一センチ	de	七一六センチ
ef	六七六センチ	fg	六九五センチ



第4図 山科陵 墳頂石列各辺の平面・側面(1) (1/40)



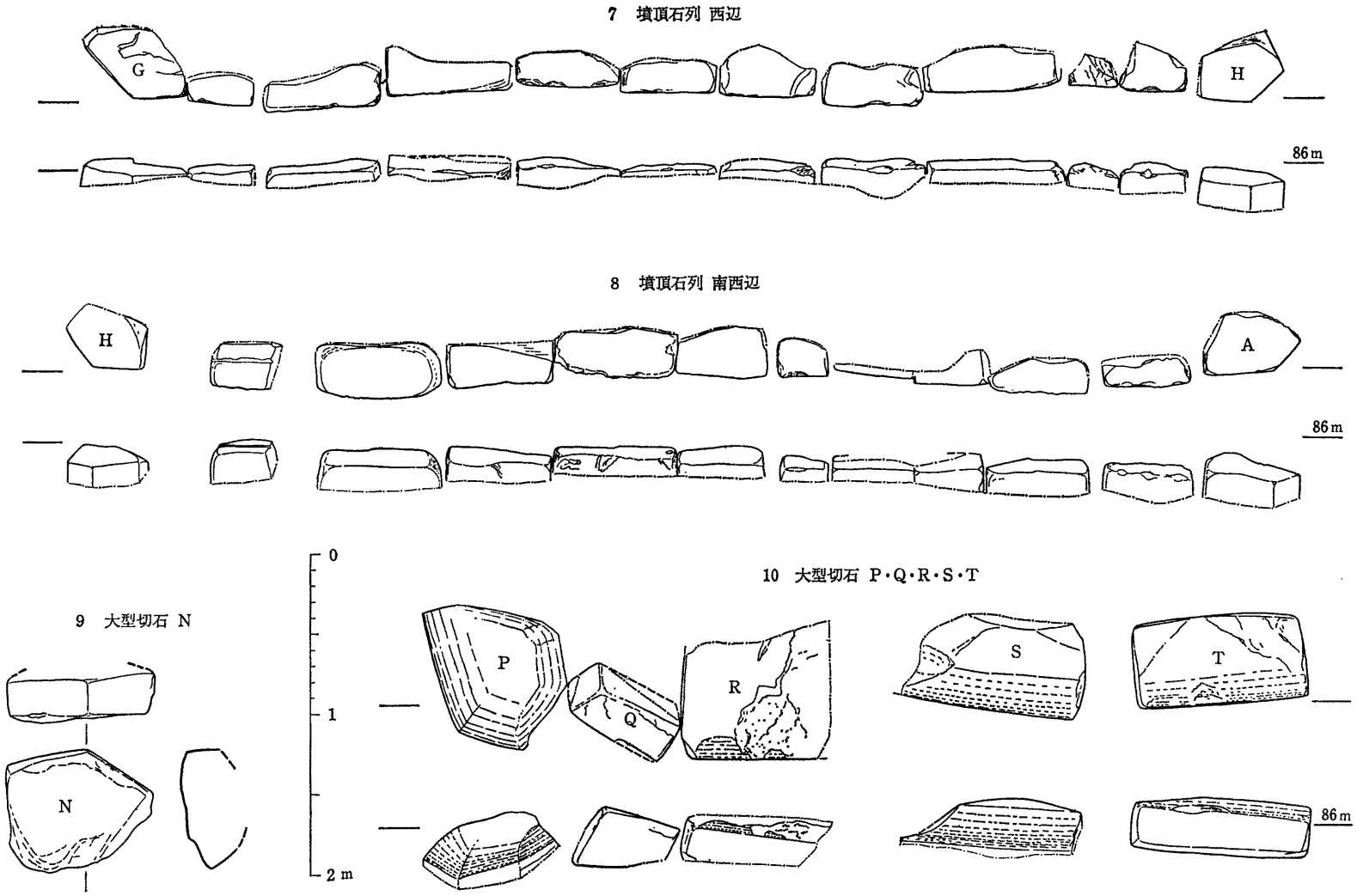
第5図　山科陵　墳頂石列各辺の平面・側面(2) (1/4)

gh　六九七センチ　　ha　七三四センチ

最も長いのはha、最も短いのはcdで、両者は六〇センチ強の差があり、比率にして約八～九パーセントとかなり大きな違いがある。各内角は、ほぼ一三五度で、多少の差も二度以内におさまる。東西南北の四辺は、下方部の各辺と平行する。このうち、西辺ghと北西辺fgの真北に対する偏角は、既知の座標値から測量計算したところ、それぞれ〇度六分二九秒（N6°29″E）、一二四度三六分一九秒（N44°36′19″E）と求められる。隅角石の経年による狂いや測量の誤差を考えると、区々な辺長に比すまでもなく、驚くほどの精確さが角度に保たれているといえ、その軸は子午線と考えられる。

各隅角石は、後面すなわち墳丘中心を向く面が未掘のため明確ではないが、平面形がB・Cに典型的に示される五角形かこれに近い形で縦長の切石である。墳丘の外を向いた前面二面は、一端が一三二～一三八度の角度で交わって等角八角形に相応しく、他端が直角かこれに近い角度で側面にとりつく。これら四面に直角かこれに近い角度で上面がしつらえられている。以上の各面は、平らか中膨みに面取されている。ただ、上面と両側面は、E・G・Hなどの後部・両側部に著見するように、必ずしも全面を面取するとは限らない。といっても、明らかな自然面は、管見のうちに認められなかった。隅角石は、Bの高さが六〇センチまで確かめられ、大きく露出するA・Bの形状や隅角石以外の列石の狂いから推して、縦長の切石と考えられる。

各辺の隅角石の間は、墳丘の外を向く前面を面取りした切石を九～一一個列べる。ただし、南辺は溝状の窪みによって大部分が失なわれているらしく、北東辺・北西辺は樹根と土石に覆われて列石の数が明らかでない。また、各辺の列石の現状は、隅角石の頂点を結ぶ線より外に出ているものが多く、その向きも多少ばらつきがある。本来、列石の前面は隅角石の頂点を結ぶ線にそろえられていたことは、平面設計（プランニング）の面からだけでなく、北辺を始め遺存のよい部分から容易に推察できる。列石は、墳丘内側の後面と下面が明らかでないが、上面・前面・両側面が互に直角またはこれに近い角度で交わり、直方体の角石に近い形状を示す。その各面は、若干の例外や不明の部分を除いて面取りを認める。特に前面は、平らか中膨みの面取りを施こす。上面・両側面は、後部まで面取りが及ばないものが多い。個々の列石の大きさは、区々である。多くは横幅が四〇～七〇センチであるが、南東辺のK・Lのような幅広い石や東辺のMのような幅狭の石もある。奥行は、後部が土石に覆われて明らかでないが、図示するところは全形に近いと思われ、深いもので約三〇センチを測り、隅角石と比較して奥行が浅いようである。高さも未掘のため判らないが、南辺のJは、上三〇センチ程が露出し、それ以上の高さとなる。各辺の列石は、先述のとおり、本来の位置より外方にせり出している。この現状から考えて、列石は、墳丘中心からの力に弱いこと、言い換えると、隅角石ほどには根入れが深くないつまり隅角石より低いこと、前面に支えるものがないつまり前面がテラスになっているこ



第6図　山科陵　墳頂石列各辺の平面・側面(3)および石列外周の大型列石の平面・側面（1/40）

とが推測される。

墳頂部を八角形に繞る石列の上面のレベルは、肉眼的に同一平面をなす。もっとも、第四図以下の側面観に示すとおり、南辺が最も低く、北方にいくにつれて高くなり、北辺が最も高く、その高低差は約四五センチある。平均斜度〇・〇二八、角度にして一度三〇分弱であるから、ほぼ同レベルといえよう。ところが、列石を子細に見ると、隣合う石同士で段差がある場合がある。例えば、南西辺の各列石の高低差(第六図8)には、列石のせり出しによる変動以上のものがあるように思われる。これが正しければ、石列を設置した当初、その上面は列石毎に凹凸があったこととなる。しかし、そのような状況は、当陵のような整備された構築物の完成な姿として考え難い。現在の石列の上もしくは内側に載っていたのではないかと推測される大型の切石が別にあり、墳頂平坦面が現石列上面より八〇〜一二〇センチほど高いことを勘案すると、現石列の上に何段かの石積みがあった可能性が高い。

石列の前後は、薄い腐植土の下に厚い礫層がある。礫は、大小あるが、主として拳大で、角の磨滅した河原石である。石列の前方すなわち墳丘外方の礫層は、本来もっと低く、つまり石列の前面はもっと露出していたと考えられる。列石・隅角石とも外側を向く前面が他の面よりも丁寧に面取り加工され、外観が意識されているし、また、列石が外にせり出している原因が、先述のとおり、墳丘内側からの土圧に対して外側から支える力が弱いことにあって、この点からも、石列外側の礫層は現在ほど厚くなく、本来、石列の上部は露見していたと推測される。

㈢ 上円部斜面に散在する大型切石(図版四1、第三図、第六図9・10、第七図、第八図)

上円部斜面、特に石列の外周には、長径が一メートル前後の花崗岩切石がいくつか散在する。それらは、既に原位置を遊離しているようで、不安定な傾きと秩序のない方向を示し、それらと一体となった遺構も表面に見出されない。こうした大型切石は、容易に移動できるものではないから、現在地より下にあったのをわざわざ持上げたとするよりは、むしろ本来は現在より上にあったものが下に移動したと考える方が適切であろう。しかし、その一つひとつの本来置かれていた場所を特定することは難しい。ただし、墳頂石列外周辺の大型切石については、現在の石列の上に載っていた可能性が最も高かろう。斜面に散在する大型切石のうち、記録した墳頂石列の外周辺の切石を中心に記述する。

大型切石N(第六図9)は、隅角石Hの外約一メートルのところに頂点を墳丘中心に向けて横たわる。径約九〇×七〇センチ、厚さ三〇センチ以上。平面は四辺が明瞭であるが、他の部分は不整形。側面は、中膨みに面取りした二面が約一三五度の角度で交わり、頂点を形成する。他の側面及び上面は、滑らかな凹凸があり、先の二側面ほどの明瞭な加工は認められない。下面は、現在横たわる向きや側面との角度が縁で約一二〇度を測ることからみて、後述の大型切石Pの上面と同様の形状かと思われる。とすれば、このN石は、裏返しになっていることになる。

石列の北西辺の外側には、P～Tの五個の大型切石がある（図版四1、第六図10）。これらは、互に近接し、いづれも石列北西辺から五〇センチと離れていず、各石の前面＝外側面はほぼ同じ方向を向いている。

大型切石Pは、隅角石Fのすぐ近くにある。平面形が、不整な六角形または七角形を呈する。側面のうち外を向く二面は、両面とも丁寧に面取りされ、中膨みを呈し、約一三五度の角度で交わり隅角を形成する。その稜線は上面中程までのびる。上面は亀腹状に緩やかな孤を描いて盛りあがる。

以上、大型切石NとPとは、形状と現在地からすると、それぞれ隅角石H・Fの上に載っていたとしても不自然ではない。

大型切石Pの南隣りにあるQは、直方体に近い切石である。現在観察できる面は、滑らかではあるが幾分凹凸があり、稜は丸みがあって画然としない。丁寧に加工した面は下になっているらしいが、未確認。

大型切石RとSは、一部が樹根と土石に覆われて全形を窺いえないが、平面形はTと同様にほぼ方形と思われる。露出した側面はどれも面取りされ、平らか中膨みを呈する。Rの上面は粗雑であるが、前面に近い局部に丁寧な加工が認められる。Sの上面は、三味線胴状に顕著な中膨みを呈し、前半分を丁寧に加工する。

大型切石Tは、横幅一〇五、奥行五五、厚さ五五センチほどで、ほぼ直方体に近い。各面とも平らか中膨みの面取りがなされ、特に前面と上面の前三分の一とは丁寧に加工されている。

第7図　山科陵　隅角石H西外の大型切石

第8図　山科陵　上円部南斜面裾の大型切石

以上のほかにも、上円部斜面に大型切石が散見され、墳頂石列西辺から二〜三メートル外には、少なくとも四個の切石が認められる。その一つは、第七図に示すように、一側面が整った五角形で、八角形の石列の隅角石を思わせる。斜面の中腹では、大型切石をほとんど見ないが、裾近くになると二・三認められる。その一つ（第八図）は、南斜面裾近くにあり、表面に凹凸がある方形に近い切石で、現上面に粗い溝状の刳込みが走る。

㈣　上円部斜面と裾（図版四2）

陵墓地形図（第二図）の上円部は、等高線の走行が隅丸方形を示し、四隅が丸くなった方墳状に描かれている。しかし、現地をみると、南部は判然としないが、北東・北・北西・西の四方の斜面は凹凸の少い平らな面となっており、各斜面は、墳頂石列の八角形に対応する。したがって、上円部は全体として八角形と考えてよかろう。

斜面には、先述の大型切石のほか、全面に大小の河原石が無数に転がっており、とくに北西・北・北東の各斜面に顕著な印象を受ける。試錐によって地中にも斜面全体に広がっていることが確認された。斜面を覆う河原石は、葺石または貼石であろう。部分的に原状の葺石かと疑われるところがないわけではないが、明らかに葺石と断定できるものは見出されなかった。河原石は大が径二〇〜三〇センチのもの、小が径一〇センチ前後のものが多い。材質は、花崗岩が主で、チャート質・石英質のものもある。

斜面表面では、段築・稜線の石積みなど遺構と思われるものは、認められない。

上円部裾は、若干緩やかな傾斜を示し、斜面葺石（貼石）の相当な堆積を考えさせる。遺構らしいものは見出せない。したがって、上円部裾と下方部上面との取り付き具合は、表面から判然としない。

四　下方部

㈠　下方部上段

下方部は、上下二段からなっている。これは、下方部全体について言えることであるが、特に南辺において顕著である。もっとも、そうした判断は、下方部南辺にある上下二段の石積みによって助けられている面もあろう。しかし、両石積みは、文久の修陵の成功図に見えないので、明治以降、本来の上段・下段の裾に設けられたものである。

下方部上段の四隅には傾斜が緩やかな平面三角形の平地があり、上段の上面となっている。その表面・地中には、河原石が無数に分布する。その多く特に上円部裾のものは、上円部斜面に布設された河原石が崩落して堆積し、上段上面が緩い傾斜を示す現状となったのであろう。本来は、上面は現状よりも平らに近かったと思われるが、そうした状況を窺わせる原位置の河原石を弁別できなかった。

下方部上段の四周は、現在、河原石の空石積みを繞らす。石積みは、

径一〇～三〇センチの河原石を、南辺で三～四段（高さ約四十センチ）、北辺で一段（高さ約二〇センチ）、東西の両側辺では北上するにつれて段数を減らす。一部崩壊したところもあるが、簡単な構造にもかかわらず全体に残りがよい。江戸時代の陵図絵にこの石積みは見えないので、明治以降の所産と思われる。

下方部上段の上面と空石積みの間は、上面の傾斜より急であるが、緩い斜面となっている。その表面と地中には、河原石が多い。この斜面の大部分は石積みの裏込めで、新しいものと思われる。この推測は、次の石列のあり方からも言える。

㈡ 下方部上段四周の石列（図版五2）

空石積みの内側、上段上面の外縁部法肩近くの四隅には、花崗岩切石の石列が小範囲ながら観察される。これは、本来の下方部上段の周囲を画して方形に繞る石列の一部と考えられる。南東・北東の二隅では切石が直角に交わるように配置される。北西隅では、西辺の北端部が見えないが、北辺の西端部と思われる石列が認められる。南西隅では、隅角の部分を欠くが、南辺西端の二石と西辺南端の二石がほぼ直交する。以上のように、四隅に露出する切石の石列は、ほぼ直交するようである。隣合う隅角の頂点を結ぶ線上付近で、石列の延長を試錐によって求めたが、どこでも石に当るものの、それと断定できるものはなかった。ただ、後述するように、沓石のすぐ北に、上面と南側面を平滑に加工した切石が列んでおり、これが下方部上段四周の石列南辺の一部と考えられる。

下方部上段四隅の石列を、空石積みからの略測値によって地形図に落すと―したがって余り正確を期しがたいが―第二図のとおりである。これによると、各辺の長さは、いづれも四五メートル強。各隅角は必ずしも正しく直角となっているわけではない。

南東隅（図版五2）では、隅石として南北に長い切石（東西約六九、南北約七六センチ以上、高さ六五センチ以上の多分直方体）を東辺南端に配置し、これと直交する南辺東端部には、隅石の西に接して東西約九七、南北約三六センチの切石、その西に接して東西約五三、南北約三〇センチの切石、更にその西に接して法量不明の切石の角が見え、合わせて三個の切石が前面（南面）をそろえて列べてあるのが認められる。

北東隅では、南北約四三、東西約三七センチの南北に長い切石を東辺の北端に配置して隅石としている。これと直交する北辺東端には、隅石の西に接して東西約五〇、南北約二四センチの切石が、その側面を隅石の北側面から約一〇センチ北方にせり出させている。

北西隅では、隅石・西辺と明確に判断される列石は見出されないが、北辺西端部の列石と思われる切石三個が見出される。西端に東西約六七、南北約三二センチの切石があり、その東には約一六〇センチの間をおいて東西約五四、南北約二八センチの切石、その東に接して東西約四七、南北約二八センチの切石が認められる。

南西隅では、隅石を失っているが、西辺の南端部に切石二個、南辺の

西端部に切石二個が列び、両者の延長はほぼ直交する。欠けた部分に隅石が一個あったとすれば、それは、東西約八三、南北約一〇七センチに近い直方体の切石であろう。西辺には南北約六〇、東西約三七センチの切石、その北に接して南北約六五、東西約三五センチの切石、南辺には東西約一〇〇、南北約三五センチの切石、その東に接して南北約五九、東西約二三センチの切石が認められる。

以上のように下方部上段の四隅と思われる部分には、その外周を画するように石組みが認められる。ただし、北東隅では二石のみで石列として十分に把握できないし、北西隅では西辺が明らかでないなど、四隅とするにはなお疑いを残す。しかし、後述の沓石の奥にある石列を勘案すれば、下方部上段は、方形に繞る石列によって画されると考えてよかろう。そしてこの列石の外周りは、直接ではないにしても、下段の上面がテラス状に繞るものと推測される。下方部上段の列石に用られた切石は、観察できる上面と三側面を平らか中膨みに面取りし、各面が直交する角石で、全体的な印象として上円部墳頂の列石より大きく、その外周辺の大型切石より小さい。

㈢　下方部下段

現在下方部上段を画する空石積みの外側には、テラスが四周を繞り、下方部下段の上面となっている。下段の斜面に移る傾斜変換点すなわち法肩は出入りや不明瞭な部分もあるが、空石積み裾から法肩までのテラスの現状の幅は、適宜略測したところ次のとおりである。区々であるが、一応の目安となろう。

南辺　一・一九メートル　　東辺　三メートル
北辺　一・三～二メートル　　西辺　二メートル

テラスの表面には、上円部斜面・下方部上段と同様の大きさと材質の河原石が散在し、試錐によっても礫石が一面に認められた。

テラスの外側には斜面が四周を繞る。斜面の高さは、南辺で二メートルを越えるが、背後の北辺では、五〇センチ内外と目される。東・西の両辺の斜面は、北に行くに従って高さを減じ、法も短くなる。南辺とその両隅では、斜面の中程で傾斜が急になり、その下で傾斜が斜面上部よりも緩くなり、切石二段の空石積みに至る。傾斜が緩くなるのは、この石積みの裏込めのためと考えられる。斜面中程の急傾斜は、裏込めのために土石を採掘したのかも知れないが、明証はない。斜面の表面には河原石が散見し、地中にも礫石があることが試錐で確かめられるが、礫石がなく地肌の露出している部分もある。

㈣　沓　石（図版五1）

下方部下段上面の南辺中央には、同上段石列に接するようにして「沓（くつ）石」（「履石」とも）または「沓脱石」と呼ばれる巨大な磐石がある。

現在、沓石の南には、約七〇センチおいて上段裾を四周する空石積みの南辺が走り、東・西・北を河原石の空石積みが囲むが、北辺のはほとんど崩壊して土が見える。沓石の側面はほとんど見えず、上面の一部が露出している。上を覆う木葉と樹根を除くと、上面は、わずかに凹凸が

あるが平らで、画然とした長方形の一枚石である。側面は四面とも平らのようである。東西二九三、南北一九〇、高さ三〇センチ以上を測る。高さについては、江戸時代の絵図の一本には、テラス上に側面を露わして描かれているから、沓石上面と現テラスとの比高が約四〇センチあるところからみて、それ以上の高さが考えられないでもない。他の切石と同じく花崗岩。

沓石の奥すなわち北方には、二〇センチの間をおいて、花崗岩の切石からなる石列が三石・東西約二七〇センチ分露出している。三石とも露出している面はいずれも平らに面取りされ、各面がほぼ直角に交わる。三石の上面および南側面はきれいに揃えられ、石と石の間もほとんど空隙もなく接し、非常に整然としている。石列の上面は、沓石の上面から二五センチ高い。中央の切石は、東西二〇七、南北一五センチ以上、高さ三五センチ以上、西のは東西二〇センチ以上、東のは東西四〇センチ以上を測る。この石列は、下方部上段裾を繞る石列の南東隅と南西隅とを結ぶ線上にほぼ位置し、その上面のレベルが両隅の石列上面から若干低いかと思われる程度であまり差異がないように目測される。したがって、沓石の奥に露出した石列は、下方部上段南辺を画する石列の一部である可能性が極めて強い。

五　結びにかえて

山科陵は、北に山丘を背負い、南に盆地を望む舌状にのびる丘陵の緩斜面に立地し、ここを羽子板状に整地し、その方形の基盤の上に墳丘が築かれたものらしい。

墳丘は、上円部と下方部からなる。上円部は、墳頂部の石列及び遺存のよい北半部斜面の状況から、截頭八角堆とほぼ断定してよい。すなわち、墳頂外周に花崗岩の切石からなる石列が八角形に繞り、この形にならった北東・北・北西・西の各斜面が明瞭である。墳頂外周の現石列の上もしくは内側には、別に切石が八角形になるように載せてあったと考えられ、その用材としては、石列の外周辺に散在する大型切石が相応しい。また、現石列の外周にはテラスが繞っていたと推測され、そうとすれば段が形成され、現石列は、墳頂部の護石または外護石列というべきであろう。斜面の現表面は、原位置を失なった人頭大ほどの河原石で覆われ、本来、葺石または貼石を布設したものと推測されるが、段築や稜線を示す特殊な石積み等は認められない。上円部裾も遺構は明らかでなく、江戸時代の記述にある「八角基壇[3]」は確認できない。上円部は「六角[4]」でないことも明らかとなった。墳頂に八角堂の柱礎が残っているとの説[5]もあるが、そう言うものは見当らず、他の列石に比較して露出しやすい隅角石を礎石と見誤まったものであろう。墳頂の「地覆石[6]」とされたのは、石列のことであろう。

下方部は、上・下二段からなる。上段の四周は、一辺四五メートル強の方形に石列が繞るものと考えられ、四隅と南辺中央に花崗岩の切石か

らなる列石の一部が露出している。列石の外側は、幅数メートルのテラスが四周する。南辺中央のテラス上には、上段外周の列石に接するように「沓石」がある。東西約三メートル、南北約二メートルの平面長方形に切った花崗岩の一枚石である。下段も方形であるが、北に行くに従って基盤が上昇するので、その高さを減じ、法足が短くなる。これに伴うような石列等は、現在のところ見出されていない。

以上のように、当陵は、段築の上円下方墳であるが、通有のものと違う特殊な点もある。その一つは、上円部が八角形を呈することである。八角丘を墳丘またはその一部とする古墳は、中尾山古墳を始めいくつか知られており、陵墓のなかにも舒明天皇の押坂内陵、天武・持統両天皇の檜隈大内陵がある。これらのなかで、当陵と押坂内陵とは、八角丘を上円部とする上円下方墳である。この墳形（陵形）が構想された思想的な根拠については、種々議論のあるところであるが[7]、中国における陰陽五行説による天円地方の考え方がなお検討される余地があるのではなかろうか。天円地方を法象した代表的な例である明堂の形制をあげれば、その基本的な構造は、平面方形の基壇の上に平面八角形の堂宇を建てたもので、その全体像が当陵と非常によく似ている。明堂全体は「上円下方」と称され、陰陽が調えられる。八角は円の一種とされるから、八角墳を円墳の一種とみることができる。また明堂に身を置くことは、天地陰陽の精気を稟けることをも意味するから、逆に上円下方墳に納まることは、魂魄がそれぞれ天地に帰ることにもなろう。

沓石については、移動した石棺の蓋[8]・横穴式石室の羨門の天井石といった説[9]があるが、下方部上段の石列と平行な位置関係・下段上面（テラス）への設置・上円部中心からの距離・多分直方体と思われる形状・二×三メートルという法量等から考えて、そうした説には難があろう。他方、沓石を「奉幣使宣命之處也」とし[10]、礼拝石とする説がある。また、発掘された礼拝石として飛鳥白鳳時代の寺院金堂正面に設けられた例があり、高松塚古墳・石唐櫃古墳では墓道上の石敷の施設が礼拝石と想定されている[11]。当陵の沓石も礼拝石である公算が強いが、上記の例とは遺跡の性格・設置の場所・形状・墳丘完成後の状態など異なる点もあり、同一のものと速断するには一抹の不安が残る。今後、類例の検出を期待したい。

（笠野　毅）

註

（1）小稿は、その折に提出された調査報告書に負うところが大きい。

（2）三次にわたる調査で、月輪陵墓監区事務所の北本三郎・鎌田恒雄・茶谷尚三・辻井忠則・大籔健司・藤井良章・藤林幸祐の諸氏を始め多勢の補助を頂いた。

（3）松下見林『前王廟陵記』

（4）註(3)に同じ。

（5）白慧『山州名跡志』

（6）和田軍一「天智天皇陵」（『日本考古学辞典』昭和三十七年）

（7）仏教思想に基づくとする説と道家の思想（経書の今文学的な解釈を含む）に基づくとする説に大別される。前者の諸説については、次の網干論文の簡潔な紹介にゆずる。
網干善教「八角方墳とその意義」（『橿原考古学研究所論集』第五　昭和五十四

年

福永光司『道教と日本文化』昭和五十七年

増田精一『オリエント古代文明の源流』昭和六十一年

(8) 註(3)に同じ。

(9) 谷森善臣『山陵図考証』

(10) 蒲生君平『山陵志』

(11) 飛鳥資料館『飛鳥時代の古墳』昭和五十四年